

博物館だより

NO. 4

SUITA CITY MUSEUM



パリ万国博覧会ガイドブックポスター(1900)
(京都府立総合資料館所蔵)

平成6年度特別展 「瓦—平安の都へ—」 余録

平成6年11月3日から12月11日まで特別展「瓦—平安の都へ—」を開催しました。

本展は、古代吹田の地には平安京造営のために吉志部瓦窯が築かれたことから、平安建都1200年の機会をとらえ、平安京の瓦がどこで、どのように生産され、都に供給されたのかを造瓦体制の面から探ろうと企画されました。展示においては、吉志部瓦窯造瓦工房の姿のほぼ全容を1/100の模型に復元し、出土品とともに、これまでの発掘調査の成果を立体的に紹介することを試みました。しかし、一方で吉志部瓦窯には残された問題もあります。吉志部から瓦工が移った洛北の西賀茂瓦窯が平安京の主要な窯場となった後、官営瓦窯としての吉志部瓦窯がどのような体制で生産を続けたのかという点もその一つです。

この問題を解く手掛りとなる資料として、吉志部と西賀茂の双方の窯から出土した同範瓦があります。瓦の範は使用を重ねるにつれて傷み、キズが生じるため、瓦当に残された範のキズの入り方によって生産の後先を知ることができます。吉志部産の瓦には西賀茂産の同範の製品よりも範キズの進行が確認される例もあり、窯の規格や構造の比較から、西賀茂は吉志部にやや遅れての開窯が明かなことを考慮すると、西賀茂の範が再び吉志部に戻ったことを物語っています。このことは、吉志部から西賀茂へと短期間に展開した、平安京造営にともなう造瓦組織再編成の動きの中で、両窯間の範の行き来が、従来考えられていたよりも複雑であったことを示しているのでしょう。

今回の展示は、吉志部から西賀茂、さらに平安時代後期まで続いた栗栖野瓦窯へという官営瓦窯の流れの中で、吉志部瓦窯の造瓦史上の確固たる位置付けに向けた試金石ともなり、また、西日本を中心とした平安京ゆかりの瓦が一同に会する機会を得たことでも意義深いものとなりました。

なお、会期中、11月13日には奈良国立文化財研究所主任研究官上原真人氏を迎え、「平安京に運ばれた瓦」と題して、11月20日には同志社大学教授 森 浩一氏を迎え、「平安京の人々と生活」と題して、それぞれ講演会が行われました。



西賀茂産軒平瓦(京都文化博物館所蔵)



吉志部産軒平瓦(当館所蔵)

平成7年度企画展

「博覧会の風景」—EXPO '70から25年—

平成7年4月29日(祝)～5月28日(日)

博覧会って何だろう？ そんな素朴な疑問が展示の企画の出発点でした。イベント・お祭りをイメージされる方もあるでしょうし、さまざまな情報や知識を提供してくれる場とお考えの方、また、遊園地やテーマパークといった娯楽性を持った場所を想像する方も多いでしょう。30才台以上の方々はやはり25年前、吹田で開催された日本万国博覧会のイメージが強いのではないのでしょうか。博覧会で何をみて何を感じるかは人それぞれで、バラエティーに富んだ多くの要素を合せ持つ空間が博覧会なのです。

ごく当たり前のことですが博覧会には開催期間があります。では、博覧会がその限られた期間の中でどのように企画され、博覧会を訪れた人々にどのような印象を与えようとしたのかという視点でみることはできないのでしょうか。博覧会が時代を映す鏡であるといわれるゆえんは、短期間の間に何かの意図を持って企画され、参加した大衆に何らかの影響を及ぼすという性格からくるものだと理解できます。ただ、博覧会の演出意図と民衆の感じとるものが合致するとは限らず、国家や資本による博覧会のシナリオにはない民衆自身が生み出す風俗も博覧会には反映しました。当時の世相や風俗と切っても切り離せない博覧会は、その歴史そのものが日本の近代史を物語るといっても過言ではないでしょう。

日本の博覧会の歴史は西洋の万国博覧会との出会いからはじまります。万国博覧会は、19世紀西欧で生まれた世界各国の産業の振興をはかる展示会で、各国の情報を一挙に集められる場としての意義が大きいものでした。ロンドン・パリ・ニューヨークなど当時の先進国の主要都市で開催され、多くの人々の関心を集めました。日本は1867年(慶応3)のパリ万国博覧会に幕府や薩摩藩などが出品したのを皮切りに、1873年(明治6)のウィーン万国博覧会には明治新政府が公式参加します。その後しばしば海外の万国博覧会に参加して、博覧会が産業の振興や技術革新に与える影響の大きさを認識した政府は、国内の殖産興業をはかるために内国勧業博覧会を計画しました。

内務卿大久保利通の提唱により始まった内国勧業博覧会は、1877年(明治10)の第1回から第3回までは東京上野公園で、第4回と第5回はそれぞれ京都と大阪で開催されました。産業の振興を前面に押し出した政府の開催意図と、物見遊山^{ものみゆざん}的な感覚で訪れた民衆との間には少なからずギャップはありましたが、回を追うごとに出品物の内容は充実し、織物業や製糸業などの分野で生産技術が飛躍的に進みました。内国勧業博覧会の変遷は、まさに日本産業の近代化の過程を手にとるようにみせてくれます。



パリ万国博覧会会場鳥瞰(1889) [L'Exposition de Paris (1889)]
(京都大学人文科学研究所蔵)



大日本内国勲業博覧会製糸機械之図(個人蔵)

明治の後半から大正にかけて博覧会は徐々にその様相を変えていきます。以前の勸業政策を重視したそれとは少し異なり、遊戯施設や水族館などのレジャー的要素は天王寺の第5回内国勸業博覧会から顕著になります。華やかなイルミネーションが話題となった東京勸業博覧会や東京大正博覧会などのように文化的な側面も重要視されてきます。

その一方で、日本の植民地政策を正当化するため、朝鮮や満州などの植民地で大々的に博覧会が開催されたり、輝く日本大博覧会や支那事变聖戦博覧会などの軍勢力宣伝を目的とした戦争博覧会の類が多く開催されました。このような国民の戦意高揚を意図した博覧会は昭和のはじめ頃から、全国各地で頻繁にみられ

るようになり、日本は戦争への道を歩んで行きました。博覧会の政治利用がピークに達した時代であったとともに、博覧会自身にとっても反省すべき悲しい時代でした。

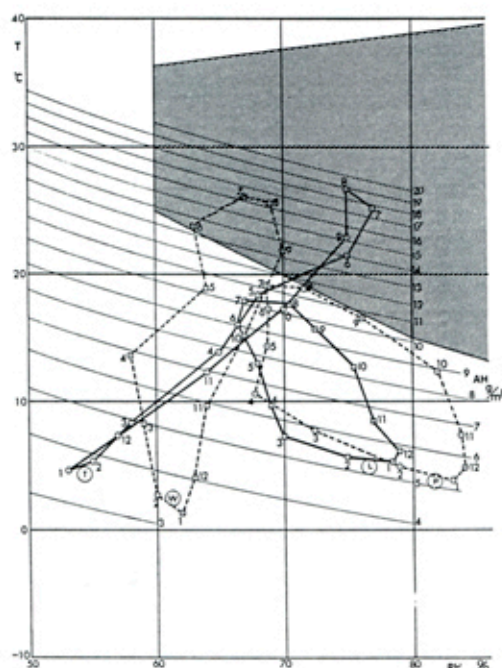
戦後の博覧会は復興大博覧会や日本貿易産業博覧会(神戸博)など、戦後に希望の光を見出したり平和への願いが込められた博覧会にはじまり、高度経済成長の延長上に位置づけられる1970年(昭和45)のアジアではじめての日本万国博覧会が盛大に催されるに至ります。日本全国各地や海外からも多くの人々が吹田の地を訪れ、その数はのべ6,400万人を越えました。日本人が世界を身近に意識し、科学技術の進歩に驚きと希望を肌で感じた日本現代史の中でも注目に値する出来事でした。

冒頭にも述べたように博覧会に対するイメージは千差万別です。本企画展で何をみて何を感じても、御覧になる皆さんの自由です。ただ、それぞれの時代の博覧会会場にお誘いできさえすれば、と考えております。



日本万国博覧会ポスター(個人蔵)

文化財の虫菌害駆除



第1図 世界主要都市の年間平均温湿度の変化と好稠菌の繁殖領域

(T:東京 W:ワシントン L:ロンドン P:パリ)

登石健三ほか「文化財の保存対策」『文化財の虫菌害防除概説』(財)文化財虫害研究所 1991年より

わが国は海に囲まれた南北に長い地形となっています。そのため、気候の地域差や四季の変化が大きく、またおおむね温暖で湿潤な傾向にあります。第1図は世界主要都市の年間の温度・湿度の変化と、好稠菌(乾燥したところにも生えるカビ)の繁殖する領域を示しています。これをみると、東京は5月中旬から10月までの約半年間が、カビの繁殖する領域と重なっていることが分かります。日本の気候は虫や菌(カビ)にとっても繁殖しやすい条件がそろっており、ヨーロッパなどに比べると、虫やカビの害から生活を守るには、より多くの工夫が必要なのです。そのため、先人たちは陽の直射を受けない北側に台所を配置し、食べ物は涼しい風通しのよいところに置くことを心掛け、衣類の虫干しをするなど、生活の智慧を働かせて虫やカビの害から生活を守ってきたのです。

ところで民具や古文書など博物館に搬入されてくる資料は、既に相当な被害を受けてい

ることも多く、早急に対策を講じなければなりません。その場合、虫の繁殖要因を押さえればいいのですが、貴重な資料を高温で煮沸したり、著しく乾燥を進めることはできません。これが文化財保存の難しいところなのです。そこで現在は、被害資料に対しては薬剤による虫菌駆除が実施されますが、文化財の特性と虫菌の種類を勘案して、効果的、かつ文化財を汚損・変質させないように、薬剤の選択は慎重を期せねばなりません。殺虫菌効果を上げるには、薬剤の粒子が小さく、内部深く浸透する必要があり、また文化財の表面に高濃度の薬剤が長期間残留すると、文化財を変質・褪色させることにもなりかねません。このような観点からみると、粉剤は均一な密度の散布が難しく、油剤は薬剤が油膜となって汚損させたり、表面に残留する危険性があり、文化財に対してはあまり良好な薬剤とはいえません。(DDTは粉剤の代表であり、かつて家庭で使われてきた「アース」は油剤の代表です。) 文化財に使える薬剤は極めて限定されているのです。



写真1 市内の仏像を加害していた
ケブカシバンムシの翅鞘と虫糞

影響を与えるため、燻蒸は特別な講習を受けた有資格者によって、専門の施設や機器を使って行われています。

文化財の燻蒸には多くの方法があります。「被覆燻蒸」は資料の周囲をシートで覆い、内部にガスを注入する方法で、建造物全体を被覆したり、室内で特設の覆いをつくりガスを注入したり、小資料を被覆してガスを注入する「包み込み燻蒸」もその一例です。

「密閉燻蒸」は機密性の高い建物の燻蒸に使われる方法で、建物に密閉化工事を実施してガスを注入します。「燻蒸庫燻蒸」は、専用の燻蒸庫を使う方法で、通常は強靱な缶体を持ち、減圧燻蒸が行えることが最大の特徴です。減圧によって薬剤が内部深く浸透し、燻蒸効果が大きいのです。最近の設備はコンピューター制御により減圧から燻蒸、除毒・排気などが自動化され、ガスの遺漏がなく、温湿度もコントロールできるため、最も安全で確実な燻蒸方法ですが、缶体規模に限度があり、超大型の資料は燻蒸できない難点があります。本博物館では、1階にこの燻蒸設備が設置されています。

現在、わが国の文化財虫菌害対策は、財団法人文化財虫害研究所が研究や技術開発、従事者の認定や指導助言を行っており、多くの博物館学芸員や図書館司書などが、講習によって専門知識を学び、文化財の虫菌害駆除の第一線で活躍しています。本博物館でも必要な時には、燻蒸装置を稼働しています。また、年に一度は収蔵庫に対する密閉燻蒸を実施し、この期間は来館者に対する安全を確保するため、2日間程度を臨時休館としています。ご迷惑をおかけするかもしれませんが、よろしくご理解下さい。

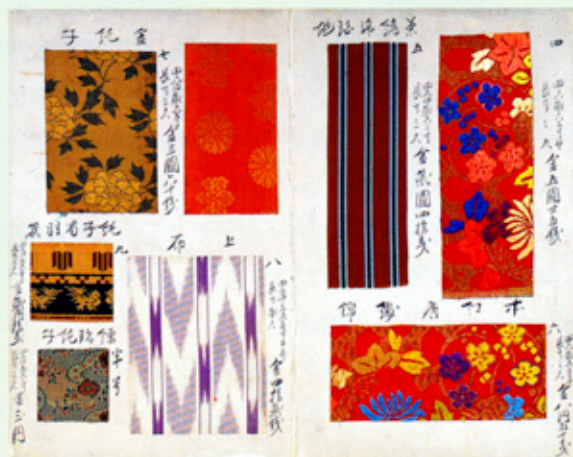


写真2 館内の密閉燻蒸の様子

企画展展示資料紹介

西陣織見本帖 (西陣織物館所蔵)

幕末から明治にかけての万国博覧会は、欧米の文明や技術を学び吸収する場であったと同時に、日本の伝統や文化を海外に認識してもらえる良い機会でもありました。1873年(明治6)のウィーン万国博覧会に参加した伊達弥助(第四世)は、梨子地織物の出品で進歩賞を受賞しました。日本の織物を世界に知らしめるとともにヨーロッパ各国を訪れ、オーストリアのジャカード織機などを持ち帰って、その後の西陣織の技術革新に大きな影響を与えました。この西陣織見本帖は洋行時に弥助が持参したもので、それぞれの見本裂に値段などが書き込まれている興味深い資料です。



講演会・展示解説 日時案内

● 5月14日(日) 午後2時

テーマ 「万国博覧会と群集」

講師 国際日本文化研究センター教授
園田 英 弘 氏

● 5月21日(日) 午後2時

当館学芸員による展示解説

講演会会場は吹田市立博物館2階講座室。
受講無料で先着順(120名)です。なお、展示解説は3階特別展示室で行いますので、観覧料が必要となります。

吹田市立博物館だより 第4号

平成7年3月31日発行

吹田市立博物館

〒564 吹田市岸部北4丁目10番1号

TEL. (06)338-5500 FAX. (06)338-9886

交通案内

JR岸辺駅下車徒歩20分

阪急吹田駅から桃山台駅前ゆき、山田樫切山ゆきバス「佐井寺北」下車徒歩10分

千里中央ゆき、阪急山田ゆき、摂津ふれあいの里ゆきバス「岸部」下車徒歩10分

阪急南千里駅からJR吹田ゆきバス②・③系統「佐井寺北」下車徒歩10分

